

はじめに

1 ミクロ経済学は身近なテーマ

公務員試験において、経済学は主要科目である。経済学を得点源にできるかどうかは、間違いなく合否に大きな影響を与える。しかし、経済学には独特な専門用語や数式が出てくるため、苦手意識が先に立ってしまっている受験生も多い。だが、ミクロ経済学は、アプローチ方法がある程度決まっており、一定量をこなすと解ける問題が飛躍的に増える科目でもある。取り上げられるテーマも我々が日頃見聞きするものが多いため、見た目の複雑さに惑わされず気持ちを楽にして取り組んで頂きたい。最も重要なことは、理論を知って勉強した気持ちになることではなく、問題を解けるようになることである。受験生の目的は合格することであって、経済学の専門家になることではない。よって、本書では厳密な理論よりも、問題を解くために必要な知識の習得に重きを置いている。基本的な知識が身に付いた後は、アウトプットの数を増やして解答力をつけてもらいたい。

ではまず、これから学習を進めていくにあたり、ミクロ経済学の全体像をざっと見ておこう。

2 ミクロ経済学の全体像

経済学とは、現実社会における経済の問題を解決するための学問である。経済の主体には大きく分けて「消費者」「生産者」がおり、両者は「市場」という場で出会うことになる。消費者であれば「効用（満足度）」を、生産者であれば「利潤」を最大化させたいと思っている。その最も合理的な解を学ぶものが「消費者行動理論」と「生産者行動理論」である。また、それらが相対する主な舞台として「完全競争市場」について学ぶ。

また、市場は常に最適な状態で保たれているわけではなく、独占や寡占など、純粋な競争が行われない市場も存在する。また、企業の活動によって公害が引き起こされることもある。そのような、望ましくない状況の市場を分析するものが「不完全競争市場」である。

最後には、これまでの内容を国家間の貿易に応用して「貿易理論」について学んでいく。

3 モデルとは

実際の経済は、非常に複雑で入り組んでいる。そのため、現実をそのまま分析することはできない。そこで、経済学では現実を大胆に単純化することになっている。例えば、消費者は2種類の商品しか購入しない、とか、手持ちの予算は全て使い切る、といった仮定を作り、その条件下で分析を行う。このように現実を単純化したものを「モデル」という。

最初のうちは違和感を覚えるかもしれないが、些末な部分をそぎ落とし、本質的な部分だけに絞って考えることで、合理的な唯一の解が求められるようにしているのである。